

だんだんテラス活動報告①

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MARCH 2015
VOL. 165



図 1. だんだんテラスオープニング①



図 2. だんだんテラスオープニング②



図 3. だんだんテラスオープニング③



図 4. だんだんテラスの日常風景

2013年11月16日、京都府八幡市のUR男山団地の中央センター商店街の一角に「だんだんテラス」が誕生した。運営は八幡市、UR都市機構、関西大学の協働で行っている。だんだんテラスの目的は3点ある。

- 1) 地域コミュニティ拠点
- 2) 男山地域のまちづくりの情報の収集・発信
- 3) 男山地域でのまちづくり活動

開設当初は、具体的な活動を決めていなかったが、住民の方からのアイデア等で様々な活動が増えてきている。

本稿ではだんだんテラスの概要として、だんだんテラス開設までの経緯、開設後の運営、活動内容、空間利用を振り返り、紹介する。そして、だんだんテラスが地域、団地でどのような役割であるか考察する。

1. だんだんテラス開設の経緯

関西大学団地再編プロジェクトでは2012年度に、「男山団地再編技術提案」を作成し、八幡市文化センターでの展覧会で公表した。そして2013年2月から、男山団地の賃貸・分譲住民、周辺地域住民、商工会、八幡市役所職員に向けて発表し、団地を見つめ直すためのだんだんワークショップ、だんだんカフェを行った。そこで得られた意見の多くは、「皆でなんとなく話ができる場所がほしい」「活気なくなった男山商店街をどうにかしてほしい」というものであった。そんな住民の声からだんだんテラスは誕生した。

2. だんだんテラスの名称・目的

「だんだんテラス」の名前の由来は「団地について談話する」の団地の「団」と談話の「談」からきている。また、急に環境を変えてしまうのではなく、「段々」変化していくという意味も込められている。そして「テラス」は常にオープンであることを意味し、空間的にも組織的にもオープンであることを示している。このようにだんだんテラスは、

団地再編としての意味もあり、また、「365日オープンの、誰でも自由にふらっと立ち寄れる場所」という地域コミュニティ拠点の意味もある。

だんだんテラスの目的は、1)「住民が気軽に集まれる拠点」とすること、2) 男山地域のまちづくり情報の収集と発信、3) 男山地域のまちづくり活動の拠点とすることである。男山地域のまちづくり情報の収集は関西大学団地再編プロジェクトの研究の一環として行われている。地域や団地に関する様々な情報を元に、団地での日常生活や課題を探り、団地のミライについて住民の方と一緒に考える場所となっている。

3. だんだんテラスの空間整備

3-1. 空間整備

団地の規格寸法や素材ではないものを使うことで、団地に新しい空間を提示できないかと考えた。また、気軽に自由に来てもらえる場所を、どのように設計にとりいれるかを模索した。木材では関西大学OBでもある出町慎氏(丹波・佐治スタジオ)、照明デザインでは長町志穂氏(LEM 空間工房)、施工では木村工務店と

多くの方と一緒に作りあげた。

3-2. 使用した素材

丹波の木材を贅沢に使用した。床材の厚は45mmとどっしりとし、柵も床に負けない寸法とした。杉の香りがし、肌触りもいいため、子供達は走り回り、寝転んだりして木の温もりを肌で感じている。

3-3. 設計の狙い

建築家の方々と大学院生が協働し設計を行った。緊急時以外は365日シャッターを閉ることなく絶えず灯りが付いている。以下にポイントをまとめる。

- ①まちから中が見えること、中からまちが見えること
→正面は間口1間の3枚框戸
- ②みんなの帰り道になるように
→土足で通れる通り土間を通す
- ③明るすぎない暖かい灯り
→暗い部分だけを電球色で照らす
- ④テーマカラーを印象的に
→学生によるDIYでペンキを塗装

4. だんだんテラスの運営

4-1. 運営の形態

2013年10月25日に、八幡市、UR都市機構、関西大学は京都府の

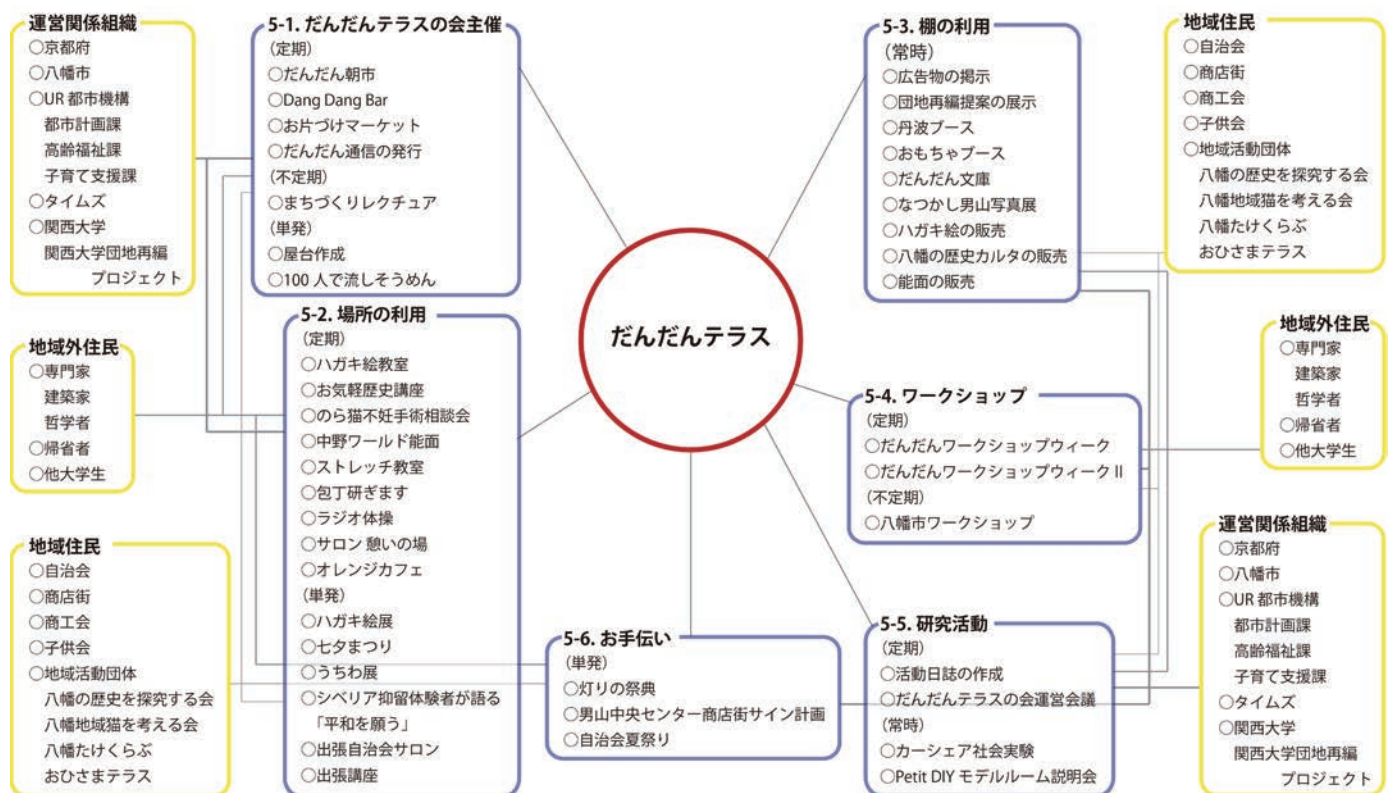


図5. 今までの活動と参加者

立ち会いのもと「男山地域まちづくり連携協定」を締結した。協定の取り組みの一つとして、だんだんテラス開設があり、八幡市が光熱費、UR 都市機構が家賃半額減額、関西大学が家賃・人材の提供をしている。

365日10時から18時まで開いている。現在学生が中心となり2人ほど交代で常駐している。現在は1人の住民の方が週1で常駐を手伝ってくれている。

4-2. だんだんテラスの会設立

2014年4月に「だんだんテラスの会」を設立した。府や市、UR、男山中央センター商店会、自治会、関西大学団地再編プロジェクト、学生で構成されており、月1回集まって運営会議を行っている。1年目は関西大学主体だが、2年目以降は住民主体に移行していく予定である。

5. 日々の活動内容

だんだんテラスでは、開設当初に具体的な活動内容を決めなかった。これは、365日オープンすることで、日々の会話から生まれ、発展する可能性があり、「だんだん」活動が増えることを狙ったからである。現在起きている主な活動は、地域の情報の受信・発信、コミュニティの促進、

まちを考えるきっかけづくり、娯楽である。主催者は住民や行政、大学と様々である。現段階で起きてきた活動を紹介していく(図5)。

5-1. だんだんテラスの会主催の活動

地域の情報発信のために2014年5月号を創刊号とし月1回「だんだん通信」を発行している(図6)。だんだんテラスで聞いた住民の生の声や、活動スケジュール、活動報告、団地再編についてのことを住民に発信している。また、様々な世代へのヒアリングを行うために Dang Dang Bar を行ったり、より多くの

人に出会うためにイベントを行ったりしている(図8、9)。

5-2. 場所の利用

だんだんテラスを住民や活動団体に貸し出している。地域団体活動の場を広げ、個人の特技を活かした教室など地域資源を活かす場所を提供している。この活動のほとんどは日常的な会話から活動に発展したケースである。地域の役に立ちたいという住民の意欲を実現する場所になっている(図10)。

5-3. 棚の利用

棚を利用し、地域の情報発信を



図 8. Dang Dang Bar



図 11. 八幡市ワークショップ



図 9. 100人で流しそうめん



図 12. 出張だんだんテラス



図 6. だんだん通信 9月号 (表紙、裏表紙)



図 10. 中野ワールド能面



図 13. カーシェアリング社会実験



図 7. 棚の活用



行っている（図7）。教室を行って
いる地域活動団体の活動紹介、近く
の公民館や美術館などの情報、男山
団地再編模型、男山団地での団地再
編の取組紹介などを掲示している。
通り土間に面しているため気軽に土
足のまま閲覧できる。

5-4. ワークショップ

だんだんテラスの会は半年に一
度、1週間連続で住民にまちを考え
るきっかけをつくるWSを行ってい
る。最終日には、住民、八幡市職員、
UR都市機構職員も参加し意見交換
をしている。八幡市主催のWSは、
各課、収集WS・実践WSの両方で
1セットであり、話し合ったことを
必ず実践している（図11、12）。

5-5. 研究活動

関西大学団地再編プロジェクト
として、団地や地域での意向調査
やカーシェアリング社会実験（図

13）、PrtitDIY モデルルーム見学等
を行っている。だんだんテラス運営
のプロセス把握のため毎日「活動日
誌」を作成している。

5-6. お手伝い

商店会、自治会などの地域が行う
行事のお手伝いしている。

6. 空間の使い方

だんだんテラスは、空間に自由度
があり、イベント、発表会、教室、
打合せ、Bar等多様な使われ方に合
わせて空間が変わる（図14）。オー
プン当初は殺風景であったが、最近
は空間をしつらえるための道具が増
えてきたため少し見た目が賑やかに
なってきた（図15）。

風が気持ちいい時には何も置かず
床に座り、発表をする時にはスク
リーンを出し周りに椅子を置く。最
近はラジオ体操後に高齢者の方が自
分で椅子を出し座っている。



図14. 空間の使い方（普段、中野ワールド能面、会議、Dang Dang Bar）



図15. だんだんテラスで使っている道具

7. だんだんテラスの意義と

今後の課題

7-1. 活動の多様さ

オープン当初の活動は、だんだ
ん朝市だけだった。それが今では1
日に何個も予定が重複するほど活動
が多くなった。散歩中に何度も寄っ
てくれる高齢男性や、WSを開催し
に来た市役所職員、野菜を買いにき
た女性、宿題をしにくる子供、打ち
合わせにくるUR都市機構職員など
様々な目的が混在していることで、
多様な人が行き来する。そしてそ
の人たちが触れ合い、新しい輪が広
がっている。「365日オープン」で
あることから「いつきても誰かがい
る」という安心感を持つことができ
る。ちょっと困った時にふらっと寄
れる。そんな場所が住民の心の支え
になっている。

また、学生は机上ではわからない
ことに直面する。実際の社会を体験
でき、改善に向け実践できるとても
貴重なフィールドになっている。

7-2. 団地に必要なコミュニティ

だんだんテラスは「365日オー
プンでふらっと気軽に立ち寄れる場
所」という地域コミュニティ拠点で
あると同時に「団地再編を考える場
所」でもある。どちらも欠けること
はあってはならない。地域コミュニ
ティ拠点の部分がなくなると日常的
な利用は減り、団地再編の部分がな
くなると、利用者がマンネリ化する。

団地のミライを考えるには、専門
的な知識がいる。また、団地はいく
つかの方向性の違う組織で成り立っ
ている。住民の心の支えになりつつ
も、地域全体で団地を考える場所が
必要だと感じる。

関連リーフレット：096 097 117 118 122 127 151

『だんだんテラス活動報告①』

記録・作成：松浦 知子（関西大学大学院）
倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

発行：2015年3月

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究
（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>